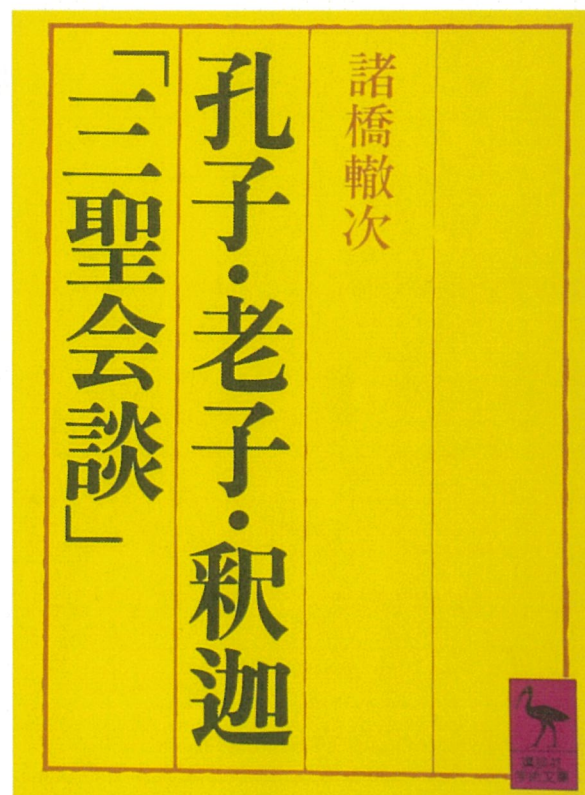




「孔子・老子・釈迦」 三聖会談（諸橋轍次）より

大匠に代わりて斬れば 其の手を傷つけざる有ること希なり



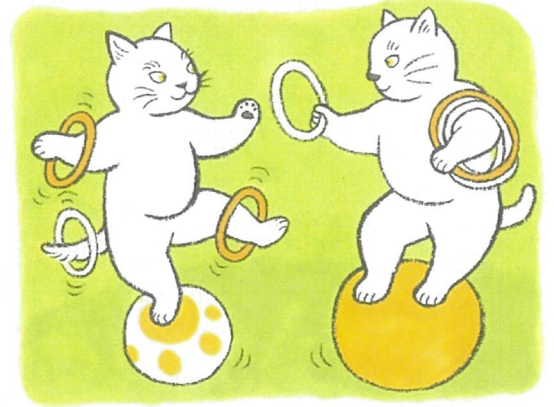
<はじめに>

この度は読書研鑽の域をです、実にお恥ずかしい限りですが、参加者の皆さまの対話のきっかけになれば、有り難く思います。

諸橋轍次さんは、有名な漢字学者ですが、東洋の思想全般に造詣があり、ライフワークとなった「漢字大辞典」は特に有名です。

生地、新潟県三条には「記念館」があり、前身の「老子会」で課外学習として訪問したことも、懐かしい思い出となっています。

「三聖会談」は、尚由子が、青年の史郎（国史専攻で中国通）と鼠堂（仏教に通じている）の補助を得て司会を務め、孔子・老子・釈迦の三者による対話をコーディネートし進める形式で構成されています。



＝ 諸橋轍次 ＝

1883年〈明治16年〉6月4日 - 1982年〈昭和57年〉12月8日）は、日本の漢学者・漢字学者。号は止軒。文学博士。東京文理科大学名誉教授。都留短期大学学長・都留文科大学初代学長を歴任。大著『大漢和辞典』、『広漢和辞典』（各・大修館書店刊）の編者代表。直江兼続の子孫を称した。

新潟県南蒲原郡庭月村（現在の三条市庭月）に生まれた。東京高等師範学校を卒業後、漢学の教員として同校に勤める。青年時代には中国に留学。このときに満足できる辞書がなかったことが、後の『大漢和辞典』の製作に繋がっている。

1925年、大修館の鈴木一平が諸橋のもとを訪れ、全漢字を網羅した「漢和辞典」の構想を持ちかけられる。この『大漢和辞典』の本格的な製作は1929年から始まった。

1929年1月に文学博士「儒学の目的と宋儒の活動」。1930年、東京文理科大学教授となる。1943年『大漢和辞典』第1巻が完成。翌年に朝日賞を受賞。しかし1945年、東京大空襲で大修館が罹災し、組み上がっていた印刷用の版が全て溶けてしまった。太平洋戦争後、完成していた巻と校正刷りをもとに再スタート。1946年、長年の無理が祟って右目を失明、左目も明暗がやっとわかる程度にまで悪化。1957年、都留文科短期大学学長（2年後に退任）1960年、同短期大学の四年制大学への移行と同時に初代学長。（1964年まで）1960年『大漢和辞典』全13巻が完成。功績により1965年、文化勲章を受章。『大漢和辞典』は数十年にわたり修訂し刊行。1972年に『中国古典名言事典』（講談社）。1982年に、大漢和の縮小版『広漢和辞典』を刊行。同年の12月8日に99歳で大往生した。



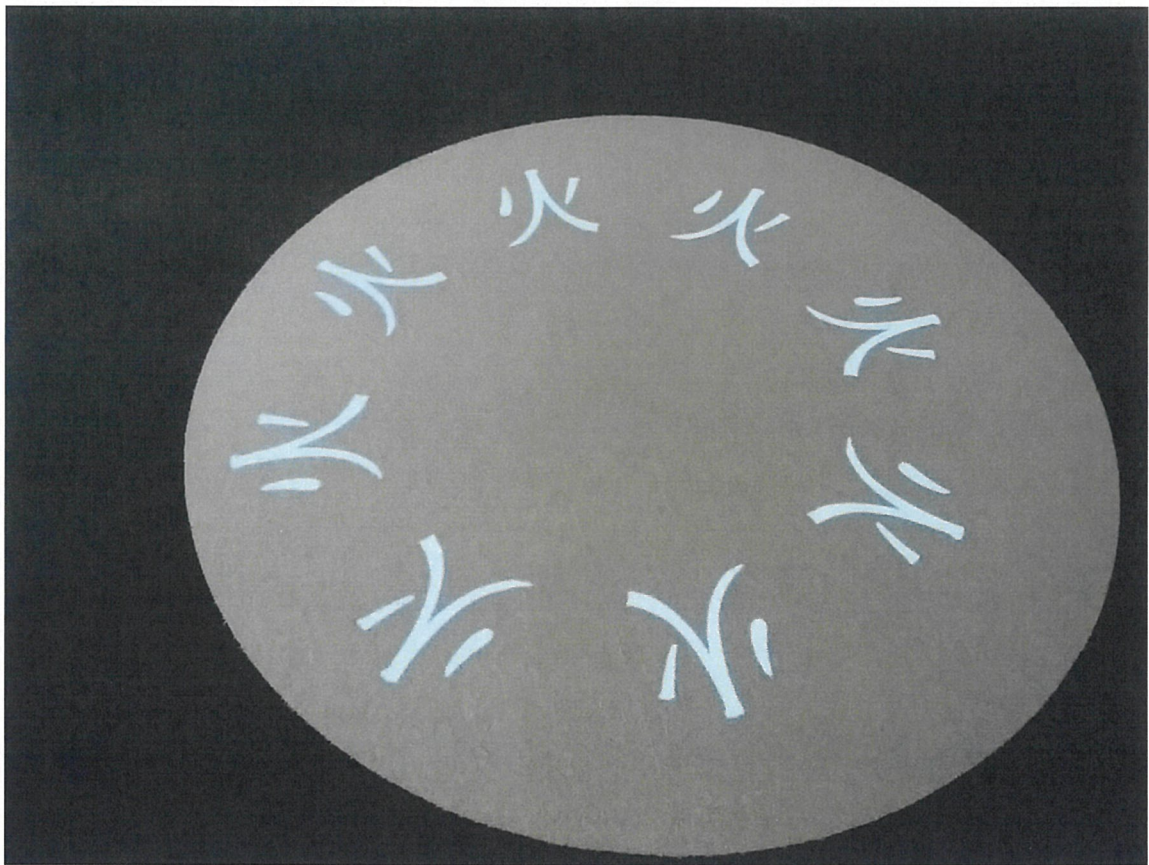
行くに小徑に由らず



轍次は蔵書の整理と目録作成のために静嘉堂文庫に通っていた。文庫からの帰り道、小田急線の経堂駅まで約一時間歩くのが常だった。轍次は、自動車道を避けて畑の中の小徑だけを通して最短距離で歩きましたが、途中で一箇所だけ大通りを歩かなければならないのを非常に残念がっていたといいます。「行くに徑（コミチ）に由らず」この論語の言葉は轍次の主張する学風なので、面白いエピソードです。

轍次の名は文豪蘇轍にあやかり命名。次男なので轍次としました。若い時代は蘇轍の字（アザナ）の子由に因んで尚由子（子由を友として交わる）と号しましたが、後に止軒としました。それは、『莊子』の徳充符編に「人は流水に鑑（かが）みるなくして、止水に鑑みる」

（流れる水に姿を映しても、はっきりとは映らないので、静まりかえっている水に姿を映してみる）に基づいたもので、学問も同様に、雑念を去った静粛な心で読書をすれば、作者の精神がわが心に映ってよくその真を理解できるということを意味しています。※明鏡止水







= 三教図 =

画家はよく、いろいろのものを一つの図幅に収めて描く。

- ・ 椿山（チンザン）の「歳寒十友」梅、水仙、八種の草花
 - ・ 河鍋暁斎の「画談」隠元（扇子）、即非（笑）、木庵（笛）、他
- 轍次が、たまたま知人に見せて貰ったのが「三教図」だった。

あっさりと三人が描かれているが、それぞれの持ち味が上手く醸し出されている。時代も思想も違う三人にも係わらず、一つの紙幅に描くことで、一人ずつ別々に描いた絵を見るよりも、それぞれの個性が改めて際立っているのは、面白いことです。

土地も時代も考えず、同じ紙面で論じ、評し、観察したら面白いのではないか。予期せぬ趣と個性が浮かぶかもしれない。と思い「三聖会談」を思いついた。

三聖に対する冒涇ではと、度々思うところとなったようです・・・

釈迦



老子

孔子

= 孔子 =

・紀元前 552 年または前 551 年に、魯国の昌平郷のはずれにある村、現在の山東省曲阜（キョクフ）で、70 歳すぎの武士であった叔梁紇（シュクリョウカツ）と、16 歳の巫女であった顔徵在（ガンチョウザイ）の子として生まれた。3 歳の時に父、17 歳の時に母を失う。若い時から様々な仕事をし、学問を身に付けた。前 538 年、15 歳で学問を志し 19 歳で結婚、翌年に長男が生まれる。後に、魯の国に仕官した。司馬遷の『史記』によると、孔子の身長は 9 尺 6 寸（216cm）もあった。春秋時代の 1 尺は現在の 22.5cm。八村塁は 203cm くらい。



35 歳、初めて弟子をとり周の都である洛陽に遊学した。
36 歳、魯の国では下剋上により、魯の昭公は家老の季孫氏との戦いに敗れ齊へ国外追放。

孔子は昭公にしたがって齊に亡命し、「三月、肉の味を忘れる」など文化に触れた。その後、魯に戻り、後進の教育に励んだ。顔回や子路、子貢など高弟の多くはこの時期の入門者と言われる。

52 歳、魯の定公によって中都の宰に取り立てられる。53 歳、魯の定公と齊の景公の和議（会談）で定公に随行、終始タカ派のようなアドバイスを行う。56 歳、弟子らとともに魯を出て、13 年に亘り諸国を巡る。69 歳、魯に帰国。学校を開き經典の整理と後進の教育に専念。72 歳（前481年）、孔子が編纂したと言われる魯の年代記『春秋』は、この年(哀公 14 年)の「獲麟(かくりん)」西に狩りして麟を獲たり、の記事で筆を終わる。同年、愛弟子の顔回が貧窮のうちに死去。73 歳、衛に仕えていた子路が死去。前 479 年、74 歳で死去した。

孔子は、為政者は有徳者でなければならず、厳しい規制よりも、道徳や礼儀による教化こそが理想的な支配の方式と言っている。

最高の道徳を「仁」と呼び、問いに答えて「人を愛すること」ともしました。

キリスト教の博愛、仏教の慈悲に似ているが、親兄弟に対する愛情を中心とし、他人にまで及ぼすという点では異質です。孔子のいう道徳による政治とは、孝悌（愛情）による政治といってもよい。「先生はどうして政界に出ないのか」と問われて「親孝行、兄弟仲良く、これも政治だ」と答えています。中国は底辺の治安を郷党(きょうとう)の自治にゆだねる事で、支配の労力を節約してきました。「家族道徳」中心の儒教が、漢から清まで（2000年）用いられた理由はそこにある。当時の人々は、呪術で神意を伺い、行動するのが常。孔子は「民の義を務め、鬼神を敬（きョウ）してこれを遠ざく」（雍也(ようや)篇）と言います。人間は良心の命令によって行動し、神の意志で行動すべきでない。神々を尊敬しつつ不可知のものとし、そっとしておけと言った。思想上、画期的な発想。

= 老子 =

老子は老(ロウ)ともいう。姓は李(リ)、名は耳(ジ)、字は聃(タン)。春秋時代に楚(ソ)の苦(コ)県(河南省鹿邑(ロウイ)県)に生まれる。周の王室の守蔵室の吏(リ)(図書役人)となるが、やがて周の衰微をみて隠棲(インセイ)を決意、西方に旅立ちます。途中、関所で関守りの関尹喜(カンインキ)に請われ、上下2編の書(81章約5000文字)を著して去ります。行方はついに不明。ただ、この伝説には疑問が多く、伝える最古の資料『史記』の「老子伝」でも疑問視されています。

孔子の先輩として紀元前6世紀に活躍した人物の実在性は薄いと思われる。現在では、前479年没の孔子より100年ほど後輩とする説や、架空の人物とする説もある。良くわからず、現存する書物から考えれば、戦国中期(前4世紀)より前の事はわからないのです。



『老子』の思想の中心は、個人的あるいは政治的なための「無為」の術を説き、「道」を説くことでした。「道」とは「これを視(ミ)れども見えず、これを聴(ミ)けども聞こえず.....混じて一となる」(老14)といわれるような、感覚を超えたもので、天地万物の存在に先だって独立自存しており、更に現実的な働きを行っている。「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」(老42)とある通り、道は万物生成の源であるとした。人間を含む世界の存在はすべて「道」により生じ「道」に従ってあるがまま(自然に)にある。しかし、人間は私欲をもって「道」を逸脱する。それが人間の不幸であるとし、ただ「道」にのみ従って分かったようなふりをせず、特別な事はしないで「無為」を維持し「無欲」のまま、他人を抜いて自分を顕(ア)わすことなく、弱々しく控えるのが良いとします。「無為にして為(ナ)さざるなし」(老37)と「無為」であればすべてがあるようにある(なるようになる)。「道」は、その働きを後に残さない自然なもので、人はそれを範として「道」の世界に帰るべきものだとしします。

= 釈迦 =

釈迦は、約2,500年前（前463）に現在のネパールに生まれました。ゴータマ・シッダールタと言ひ、仏教の教えを起源しています。



釈迦は王子として生まれましたが、若き日より人々の苦しみを目の当たりにし、深く心を悩ませていました。出家をして、人生の苦悩の解決法を探しに行きたいという思いが強くなりました。釈迦が「生・老病・死」という万人が避けることができない四つの苦しみを覚知し、その解決法を求めようと願う契機となった四つの出会い（四門遊観）が伝えられています。※東老西病南死北沙
釈迦は、やがて王族生活を捨てて、どうしたら人間の苦悩は克服できるのか、を覚めるために宗教的探求の旅に出ました。

法華経は、八万法蔵の中でも最重要の經典として、知られています。この法華経の中で、釈迦は自身が覚った生命の究極の真実を説いています。その鍵となるメッセージは、無限の慈悲、智慧、勇気を具えた最高の生命境涯である仏界です。仏界は、性別、民族、社会的地位、知的能力にかかわらず、あらゆる人に具わっている、というものです。

法華経は、日常生活と其中で直面する様々な課題に積極的に取り組むことを促しています。仏の境涯とは、現実課題から逃避することではなく、人生の苦悩と矛盾に立ち向かい、それらを変革し、幸福を創造する為の、無限のエネルギーを生み出す源泉。つまり、法華経は一人の人間の一念が一切を変えていく力となることを明かした、究極のエンパワーメントの教えです。一人の生命に内在する無限の可能性と尊厳を表現した、究極の教えが法華経なのです。

法華経の冒頭部分で、釈迦は、自らが覚知した真理（法）は、あまりにも深遠なる教えなので、言葉によって表しがたく、また仏の智慧

をもってしか理解できない、と弟子らに宣言します。

その法とは、生命と宇宙を貫き、あらゆる現象として現れる根源の法であり、それこそが生命の究極の真実の姿とします。この妙法は、言葉では表しがたいが法華經の經文の中に内包されており、釈迦在世の弟子ならびに未来の信徒達は、この法華經に帰依し、その教えを他の人々に弘めることで、自らの生命に内在するこの法を開き顯すことができる、と釈迦は説いています。

原語のサンスクリット語では、法華經の題号は、Saddharma-pundarika-sutra（サッドダルマ・プンダリーカ・スートラ）といいます。数種類の漢訳が作られ、その中で、鳩摩羅什（344-413）が翻訳した「妙法蓮華經」が最も優れた訳とされ、中国と日本で流布しました。

6世紀、釈迦の説いた教えの中で、法華經が最も優れていると位置づけた天台大師は、法華經の内容が大きく変化することに着目、經典を前半と後半に分けました。後半ではそれまでの釈迦の立場を抜本的に

変える、新たな観点が展開されていると論じています。

法華經後半において釈迦は、自身が今世に生を受けたインドで初めて成仏したという立場を捨て、実際は遙か久遠の昔に成仏していた、と明かします。これは、仏の境涯が、現在も、そして永遠に万人の生命に内在しているという法理を示しています。

釈迦が法華經を説いた目的は、仏法の根幹をなしている慈悲の願いです。それは、如来寿量品第十六の一節にある釈迦の誓願の言葉に表されています。

每自作是念（仏は常に念じている）

以何令衆生（どのようにすれば、衆生を）

得入無上道（無上道の道に入らせ）

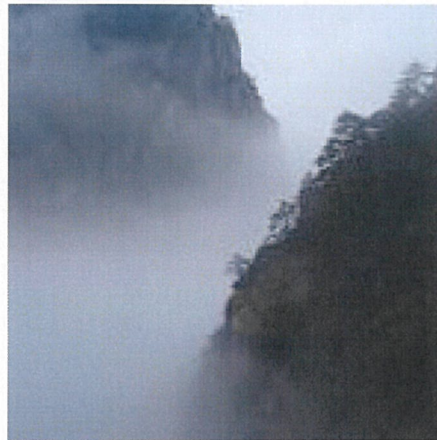
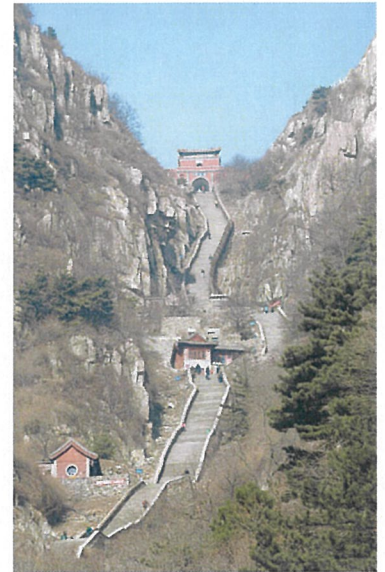
速成就仏身（速やかに仏の身を成就させることができるかと）

三人の紹介はここまで・・・



富士山

泰山



廬山

= 最適な会場はどこ =

尚由子がはじめに相談したのは、最適な会場はどこかと言う事でした。高尚な会なので、高いところが良いと「富士山」でどうかと思う尚由子に、史郎は「日本はあかんでしょ。孔子様は山東省、老子様は河南省、お釈迦様はインドですよ。日本の招待でも遠すぎませか。」と異議を唱えます。尚由子は「孔子様は旅慣れていらっしゃる、老子様は水を渡り空を飛ばれる。お釈迦様も西遊記で『孫悟空の十万八千里をひとつ飛び』を掌で笑われるお方。問題はあるまい」と切り返した。しかし、結局、主催者が日本、孔子・老子が中国、釈迦がインドということで、「ひとまず中国で開催しよう。」ということに。

山は、儒教ゆかりの山、論語にも出てくる泰山、仏教ゆかりの天台山、五山（東の泰山、西の華山、北の恒山、中央の松山、南の恒山）などがありますが、最終的に「廬山」の五老峰となりました。

Q、みんなどうやって来るの？

=会場へのアクセス=

いよいよ五老峰での会談となるが、皆さんはどうやって来場するのでしょうか。

尚由子が言うには、

人に会った時は車の軾（シヨク）に手をついてお辞儀をすると論語にあるから、孔子様は車に乗って来るだろう。

世をいとうて遁世（トシ）を志し西の方を過ぎ去ったとき、青い牛に乗っていたので、老子様は青い牛に乗ってくるだろう。

インドでは象が国獣だし、白象に乗った「普賢十羅刹女象図」もあるから、お釈迦様は白い象に乗って来るだろう。と推測します。

三聖はその通りに参集するのですが、尚由子は三人とは初対面。集まったものの、誰も何も言わない状態が暫く続きます。

さてどうする・・・

=三聖が五老会へ=

尚由子は、三聖は天下万世にわたる人の道の大老なので、会の名前を「三老会」にしてはと提案。しかし老子が「語呂が悪い」と言うので、五老峰に集まっているので「五老会でどうか」と再提案。釈迦が五老が三人ではおかしいが、「司会の尚由子も老人だし、一人加えては。」と提案。老子も賛同し、四老とする流れになる。更に、釈迦が「五老峰は盤古の昔からある老年の山。五老峰自身も、一人として加えよう。」となり、めでたく「五老」がそろうことになる。

ここで、黙って聞いていた尚由子は「便宜の為とは言え、私などは・・・」と固辞。そこで、老子は「寵辱驚くが若（ゴト）し」（老13）寵を上辱を下とするのは小人。気にするなと言ひ。孔子も、くだらない謙遜はするな。と言います。

かくして、皆の賛同が得られ、会の名前は「五老会」と決定する。

※昔、五つの星（木火土金水）を五老と呼んだ。天に輝く星とも。

=とりあえず雑談から=

いよいよ、初めての会談へと進んできますが、いきなり「思想」「哲学」と言うのも構えてしまう。そこで尚由子は、まずは雑談からと「好きなもん有りますか」との問いを投げかけました。

孔子：「酒は量なし」いくらでも頂くが「乱におよばず」。

釈迦：むさぼりはしないが、若い頃王宮では相当やりました。

老子：寺の門前には「葷（ク）酒山門に入らず」（匂いのきつい野菜と酒は寺に持ち込むな）とありますね。

釈迦：修行には、禁酒禁欲も必要でしょう。私は出家してからは、酒は飲んでいません。弟子も強いずとも自ら禁酒しています。

老子：それは、お釈迦様の高德の善智識のおかげ。形ばかり整えると、かえって般若湯（防寒の酒）などにごまかします。まあ、自然が良いのですが。



孔子：「時ならざれば食わず」（論）で、食べ物にはうるさい方です。飯の味の変わったものは食べないし、切り目が正しくないものも食べません。

釈迦：それは結構なことです。食物は注意するのが良いですね。ところで、何か趣味はおありでしょうか。

孔子：音楽を子どものころから好んでいました。齊の国で舜が作ったと言う「韶」（ショウ）を聞いたときは、三ヶ月食事の味が判らないほど陶醉しました。

音楽は心をやわらげます。老子様の教えには背きますが、私は「礼の教え」を強調しています。ただ、礼は分を尊びますので誤れば分断をまねきます。老子様の言う「忠信の薄」（老38）となりがちです。「親子・君臣・夫婦・朋友」またしかり。音楽は和を尊びますので、共に奏できれば心が一つになる。過去の音楽を聴けば、過去の人とも心が通じる。そんなわけで、音楽を好んでいるのです。

老子：それは結構なことです。孔子様に言うのではありませんが、私は「五色は人の目をして盲せしむ」「五味は人の口をして爽（効）わしむ」（老12）と教えています。一般の人にどんな影響をあたえるか少々気になります。

孔子：ご心配には及びません。若い者には「少（ワカ）きときは、血氣いまだ定まらず、これを戒むること色にあり」（論）と教えていますし、私もそのような事にはならないと思います。※君子三戒

かくして、話題は「山水」（自然）にうつり・・・

孔子：私は山が好きですね。「知者は水を楽しむ、仁者は山を楽しむ」「知者は動く、仁者は静かなり」（論）東山に上っては、魯の国を小と思い、泰山に登っては、天下を小なりと思いました。高いところに登って曠濶（コウカツ）の抱懷（ホウカイ）を得るのは、山のおかげです。

老子様は如何でしょう・・・

老子：私は山も好きですが、水が最も好きですね。

孔子様は、山の高いところが世界を大観するのに良い。とお気に入りのようですが、私は、反対に低いところの谷が気に入っています。「谷神（コクジン）は死せず、是を玄牝（ゲンペイン）と謂う」「玄牝の門、是を天地の根と謂う、綿綿として存するが若（ゴト）く、之を用うれば動ぜず」と申しました。※玄牝とは、万物を生む不思議な女性。

谷は、不思議な女性のようなもので、中からなんでも出て

くる。玄牝の門から天地も生まれてくる。谷からは万物が出てくるので、谷を大切にすれば世が壊れることはない。低いところにあるものは、万物を生む源なので、我が道を玄牝（ゲンペイン）とも言っているのです。

谷を称えています。谷に流れ込む水を、より以上に敬い愛しています。

第一の理由は、水は柔弱で他と争わない。器に合わせて形を変える。一方、弱いようで大きな力を持ち、万物にとっては必要不可欠な存在でもある。

「天下水より柔弱なるは莫（ナ）し、而れども堅強者を攻むるは、之によく勝るもの莫し」（老78）「天下の至柔は天下の至堅を馳騁（チリウ）す」（老43）と申しました。※馳騁はほしいままに、奔放に行動すること。

一番柔らかいが、最も堅い鉄も溶かす偉大な力を持っている。

第二の理由は、水は謙虚で、自然であり他と争ううことをしないところです。

人間はやたら高いところに登ろうあせる。世の紛争の原因も多くはそこにある。水は、おのずから低いところへと進んでいく。そして、低いところにいるからこそ、万物が流れこみそれを包み込むことができる。そう言うところを「上善は水の若し水はよく万物を利して而も争わず」（老8）と言い

「江海の能く百谷の王たるゆえんは、其の善く之に下る以つての故に、能く百谷の王と為る」（老66）とも言いました。

揚子江や海はあらゆる谷の王になる。自分が一番低いところにいるので、全てがそこに流れ込んでくるから。これは大国の横暴を戒めることにも通じる。「大国は下流なり天下の交わりなり、故に大なる者は宜しく下となるべし」

（老61）大をたのんで上位にいようとすれば必ず失敗するのです。孔子様とは意見が違うかもしれませんが・・・

Q.山か谷（水）か、どちらがお好み？



ヒマラヤ



揚子江

孔子：老子様の水賛美には異論はないのです。実は大賛成なのですが、理由が少々ちがうのです。

「逝く者は斯くの如きか、昼夜を舎（オ）かず」（論）と川のほとりで溜息をついたものです。

一息の間でも間断なく、流れてやまない自然の姿が水そのものであって、君子はそうあるべきであって、そのための努力を怠ってはならないのです。

孟子君は、「孔子は『水なるかな、水なるかな』と言っているが、水に何の求めるところが有るのか」と問うた男に、次のように答えている。

「原泉混混として昼夜を舎（オ）かず」「科（ア）に盈（ミ）たして、而る後に進み、四海に至る、本ある者は是（カ）の如し」と。わが意を得たりです。つまり、水の活動性と漸進性は君子の修養に似ているのです。

これが、私が水を礼賛する理由なのです。「知者は水を楽しむ、仁者は山を楽しむ、知者は動き、仁者は静かなり」（論）と言ったのは、違った角度での仁智の傾向論なのです。

釈迦：と言うことは、孔子様は水の積極性と漸進性を考えて、君子の修養に役立てようとされ、老子様は、全く別の方面で水の柔弱さ、争わない姿、謙遜する姿を賛美し、水を消極面から称えておられる。

これはまた、どちらも価値の高いご意見と言わざるを得ません。

その後、雑談の話題は「赤ん坊礼賛」「大自然」などを取り上げて続けられた。

やがて、尚由子は「三聖の人間観」に迫ろうとする・・・

= 三聖の人間観 =

尚由子と言います。ひとの真の姿に接するには、思想を知るなり業績を知るなり、様々な方法がありますが、それは他日に譲って唯「こういう人は好きだ、こういう人は嫌いだ」といった、単純な発想でお話を伺えないでしょうか。そうすれば、地に着いたお人柄がうかがえると思っています。ついては、「事の正邪・善悪・利害」などは気になさらないようにお願いします。

釈迦：面白いですね。ところで、孔子様は「聖人は悪（ニク）むところなし」と仰っていますので、好き嫌いなどは絶対にないと決めていらっしゃるのでしょうか。

孔子：わたしはともかく、老子様は「聖人は常に善く人を救う、故に棄人なし」「善人は不善人の師なり、不善人は善人の資なり」（老27）と仰っている。したがって、「棄てるひとはいない」と言いうことになるでしょう。

「人の不善なるも何の棄つることかこれ有らん」（老62）とも仰っている。したがって、老子様は、人の善悪については、あれこれ言われたいんじゃないかな。尚由子さんの提案からして、老子様に伺うのが良いのではないかな。

老子：これはとんでもない展開になったな。私は、孔子様からと考えていたので、とんだことになってしまった。まあ、仕方がない。はじめに、私の好きな人間について話そう。

一つは、「自分の地位に満足している人間」だね。

茶碗に水を入れすぎるとこぼれる。刃を鋭く研ごうとすると刃がこぼれやすい。あるところで満足してやめておかないといけないと思う。「金玉、堂に満つれば之を能く守ること」莫（ナ）し」「富貴にして驕れば以てその咎（トガ）を遺す」

「功遂げ身退くは天の道なり」（老9）ということだ、

「なすべき事をして、身を引く」といった考えで身を処して

いる人が好きだな。「足ることを知る者は富り」（老33）
と言うことだね。

それから、謙虚なひとも好きだね。「明白四達にして能く知ること無からんか」（老10）ということだ。手柄をたてにして自分の劫にするようなことをしない玄德の人が好きだ。そうゆ人なら谷となって衆望をあつめ、天下の模範ともなるだろう。他人は「つねに下敷きになって損をする」というだろうが、全く逆で、自分から手柄を得よう、誇ろうとすれば、かえってしくじるものだ。「自ら見（ア）わすものは明らかならず自ら伐（ハ）る者は功なく、自ら矜（ハ）る者は長からず」（老24）だ。要するに人は、自分をよく知ることだ。「知って知らずとするは上なり、知らずして知れりとするは病（ヘ）なり」（老71）ともいうのだ。「人に勝つ者は力あり、自ら勝つ者は強し」（老33）だ。そうできて本当の強者だ。だから、自らを知り、自分に勝つ人が好きなんだよ。

続いて、嫌いな人間についても話しておこう。

一言でいえば「毀誉褒貶」にまどう人だ。「寵辱驚くが若し大患を貴ぶこと身の若し」（老13）で、名誉や不名誉などちょっとしたものを、得た失ったと大騒ぎする人間は嫌だ。つぎに嫌いなのは、出来もしないことを無理してやっていく人間だ。背伸びをしたって長続きはしない。「跂（ツマ）たん者は立たず、跨（マ）ぐ者は行かず」（老24）で、無理は長続きしないのに、無理やりやろうとするから嫌いなのだ。

更に嫌いなのは、驕慢でやたら得意になる人間だ。

もっと言えば、知者・英才は好まない。学者嫌いで文化文明は虫がすかない。「知るものは言わず、言うものは知らず」（老56）で、良く解っている知者はあまりしゃべらないんだ。

大事ななのは「その光を和して、その塵に同ぜよ」（老56）であって、世俗の濁った世でも、才能は玉のような潤いのある光で包み、天地万物と同和することだよ。※和光同塵

世間には、やたら得意になっている人間と、超然とした人間がいる。前者は俗物で、後者は母にやしなわれる自然の人。母は天地の自然で、そのふところに疑いなく飛び込む。これほど尊いものはない。「母に食（ヤシ）わるるを貴ぶ」

（老20）道を修めた人はそれが出来る。

俗人には、それが出来ないので、右往左往し人生に迷っている。方途（道）に迷って悟ることのない人は好まないよ。

老子さま、おいにおしゃべりされたところで・・・

尚由子：好き嫌いは理屈をこえた人情のしぜんで、その人の地の姿が現れるものですね。道を志す者は、尊信する方の思想・学説を学ぶことは元より、好悪をうかがって、人情の機微にふれることが有益であると、痛切に感じました。続いては、孔子様のお話を伺いたいと思います。

孔子：やっぱりその注文は難しいな。はじめは善い人と悪い人を区別して「善い人は好き、悪い人は嫌い」とか「理想にかなった人は好き、かなわない人は嫌い」などと考えたのだが、どうもしっくりこない。どう答えようか苦しんだが、しいて言えば、「君子型の人は好き、小人型の人は嫌い」になるのかなと思う。こういった前提で聞いてもらえると有難い。では、君子と小人を比べてみよう。

「君子は義に喩（ユ）り、小人は利に喩（ユ）る」「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」（論）君子は義に立ち、あまねく公平無私に交際していく、小人は雷同するが遍波で自分の利益だけに都合のいい者とかかわっていく。また君子は人に美点があれば認めるが、小人は自を利するもの以外は、こころよしとせず、失敗を喜びもする。だから、君子は好きだが、小人は嫌いなんだ。

責任についても同じで、君子は責任を引き受け、人のせいにしないが、小人はすべて人のせいにして責任を逃れようとする。「君子はこれを己に求む、小人はこれを人に求む（論）人を使う場合も、君子は器（使う人）に合わせて長所を認め力を発揮させるが、小人は、相手にすべてを求めて、あれもこれもやらせようとする。過ちが有った場合も、君子は自分に過ちがあれば明らかにし反省するが、小人は責任は他人に転嫁し、利益だけを取ろうとする。君子は「君子の過ちは日月の食、過つときは人これを見る」（論）だが、「小人の過は必ず文（ガ）る」（論）で、逃げ口上を作って弁解するものだ。生死の重大事においてはなおさらで、君子が平然として「正を失わない」のに対し、小人は「濫して」慌てふためくのだ。二者は立場も方向も全く違うというわけで君子型の人好きだが、小人は嫌いなんだよ。

釈迦：そういえば、莊子さまも「君子は名に殉ず小人は財に殉ず」（莊）と書いていますね。小人はややもすると、命がけで財を求めかえって、命を落としてしまう。この考えは孔子様の影響と言ってもよいのでしょうか。

尚由子：不肖、僭越ながら申し上げます。
後世には、君子と小人の対比が一層多くなっていますが私は「君子の交わりは淡きこと水の如し。小人の交わりは甘きこと醴（アマザケ）の如し」（莊）という言葉が好きで、小人はいかにも親しそうに見えても、実に後味が悪いものですね。

孔子：さて君子型は好きなのだが、もう一つ、中庸型の人好きだ。極端に走る人が嫌いなのだよ。



尚由子：そういえば、「君子の天下に於けるや、適も無く莫も無し、義と与（トモ）に比（シタガ）う」（論）というのがありました。むやみに一方に味方することなく、賛成も反対もしない。義にかなったことを行う。というのです。まさしく中庸の道を守るというご意見ですね。論語には、孔子様ご自身が、伯夷など隠逸の士と言われる人びとを評しておられますが、それぞれの長所・欠点をとらえになっております。そして最後に「我は則ち是に異なり」、「可も無く、不可も無し」（論）とご自身を評されている。これは一見、主張も主義もなく無定見のように思えますが「中行中庸」という至高のものと思われれます。孔子様が門人から「温にしてはげし」「威有って猛（タカ）からず恭（ウヤヤ）しゅうして安し」といわれているのも、中庸の大道をまもり体現されたからだと思っています。

釈迦：孔子様は中庸型の人が好きならば、中庸に反する人がお嫌いだと思いますが、それ以外に嫌いな人はおありでしょうか。

孔子：「益者三友、損者三友」（論）と言って、上辺だけの不正直な便辟（ベンペキ）人、誠実さのない善柔（ゼンジュウ）人、口先だけ達者な便佞（ベンネイ）人は、損者と言って付き合わない方が良い嫌いなひとです。

老子：では、嫌う以外に悪（ニク）む者はおりますか。

孔子：人間ですので悪む者はおります。ただ「罪を悪んで人を悪まず」（論）と考えます。門人にも「君子もまた悪む所ありや」と聞かれましたが「悪むことあり」とこたえました。具体的には「人の悪を称する者を悪む」「勇にして礼なき者を悪む」などと答えました。その門人に「君はどうかね」と問うたところ、「不遜にして礼無き者を悪む」「訐（アバ）いて以って直となす」等と答えました。

他人の心を考えず勘繰りを入れ憶測で話し、自分が知者のように振る舞う。善悪の問題ではなく、語りたくないことを暴き立て、直人のように振る舞う。

実にいやなものです。門下でありながら、自分以上の優れた答えだと感心したものです。

総じて言えば、本ものは好きだが、本ものを装う偽物が嫌い。ということです。「紫の朱を奪うを悪む、鄭（テイ）声の雅楽を乱るを悪む、利口の邦家を覆すを悪む」（論）ということで、中間色の紫が正色の朱にとって代わる、俗悪な声が人の耳に入り正しい雅楽を混乱させる、利口は口達者だが信用すると国家も転覆させてしまうのは、似て非なるものが正を破り害するもので。私のにくむところなのだ。

では最後に、それらの代表として「郷原（キョウゲン）は徳の賊なり」（論）について話そう。※郷原=八方美人

尚由子：「郷原」については孟子さまの激烈な解説があります。

孔子様は「我が門を過ぎて我が家に入らざるも、我の憾（ウ）みざるものは其れ惟（タ）だ郷原か。郷原は徳の賊なり」（論）とおっしゃった。

せっかく門まで来たのだから、お茶でも飲んでいけば良いのに。という気持ちは、人情で誰にでもある。だが、郷原だけは、そんな気はまったくおきない。それほど嫌いだということです。それほど、郷原は有徳に似て有徳でない似而非（エ）ものだからです。郷原は、いたずらに世の狂者（理想家）の悪口を言い、世に媚びている。彼らは「狂者は孤高を気取って大言しているが、言行は一致していない。狷（キョウ）者（頑固者）は口を拓けば古人はこうであったと偉そうに言うが人には親しまれず、世には疎（ウ）んじられている愚か者だ。かれらは、この世に生まれたら、世の人と調子を合わせていればよいではないか。」と言います。

そう、郷原こそ自分の心を欺いて世に媚びているのです。孔子様が郷原を嫌われるのはこのためです。

さらに、たしかに彼らは郷の人から「原人」（まじめな人）と言われる通り勤厚らしいところも見える。ことさら非難されるような悪事もしません。しかし、根に主張もなく、誠意もない。のらりくらりと、流俗に同調し汚れた世間に調子を合わせている。だから世間からは廉潔らしく思われ、自身も処世の要道だと得意になっている。似而非（ニヒ）なる者であり、いつまでも「堯舜聖賢」（ギョウシュンセイケン）の道に入ることが出来ない。

孔子様が「郷原は徳の賊なり」とされたのは、このためなのです。

老子様が「孔子様の人の好き嫌いを聞いて人柄が能く分かった」と言ったところで、この話題はひとまず終わりとなりました。

=三者による会談=

三者による会談には、どのような意味があったのでしょうか。一対一であれ、複数人であれ、対話にはいくつかの種類があります。互いの主張を聞くことで、知見を増やそうとする学習型の対話。何かの目的を達成するために議論を重ねる、協調建設型の対話。自身の主張を正当たらしめるために、相手を論破する、攻撃型の対話。

それぞれに、意味があると思われませんが、攻撃型の対話からは自身の成長が見込めないように思います。論破すると相手は成長の機会を得るのに対し、自身は一時的な気持ちよさと満足感のみで終わると思うのです。しかし、マスメディアにしても、SNSの世界にしても、論破型（攻撃型）の論調が多いように思います。私の学生時代では流行っていた「ゲーテ批判」的な会話などは、もう古いスタイルなのかも知れません。

「格差社会」「ジェンダーフリーや多様性」「SDG,S」などの問題の根っこにあるのは、論破型の対話に象徴される「勝他」「小我」と言った心の傾向性のように思えてなりません。

そして、それは実は「臆病」の裏返しなのかもしれません。

その意味で、これからは、論破ではなく「響き合う対話」を模索していく時代のように思います。

自分の外側に、自身にないものをどう見つけ取り入れていけるか。互いが、勇気を持って、それを求めていけば、あらたな活路が開かれると信じています。

現実の世界は複雑で、簡単ではないのですが・・・

三聖会談では、時にチクリと嫌味が入ったりもしますが、相手を否定することはされていません。諸橋徹次さんが、この会談は「勝劣を付けるためのものではない」と書かれているとおりです。この会談から、そういった視点を、改めて学んだような気がします。

=おわりに=

「聞・見・知・行」（学は之を行うに至りて止む）荀子

老子会から始まり、現在に至る事業団の活動ですが、講義やイベント等を機会とし、建設的な価値創造の会話が重ねられていることを嬉しく楽しく思い、感謝しています。

これからも、この良き伝統が続けられ、響き合う言葉と心の連帯が広がることを願い、微力ながら精進していきたいと思えます。

**= ご聴き頂き 有り難うございました =
（お お き に）**

おまけ

